

# 和歌山県師範学校数学教育関係旧蔵文書の全体像

## Overview on Mathematics Education in the Historical Records of the Wakayama Normal School

片 岡 啓

Kei KATAOKA

(和歌山大学教育学部)

2014年9月30日受理

### 要約

本学部の前身である和歌山県師範学校の保存文書の中に、数学の授業の内容を知ることのできる多数の史料がある。定期試験問題冊子や学校の指導計画である「教授細目」、授業を記録した「教授予定及進度週録」などである。明治末から大正初め頃の文書である。本稿では、これまでの主として男子生徒に関する考察に加えて、すでに明治24年に設置されていた「女子部」や、明治41年創設され、中学校卒業生を受け入れた「第二部」などの多様な教育活動を明らかにし、史料の全体像を示した。女子の中等数学教育としての充実ぶりや、のちに専門学校昇格の基礎になったといわれる「第二部」の初期のころの算術教育の姿を新たに知ることができた。

本学が所蔵する師範学校時代の多数の文書は、中等教育の一角を担っていた当時の教育内容を具体的に知ることのできる貴重な史料である。筆者らはこれまで明治末期の数学教育の内容を、主として男子生徒を中心に明らかにしてきたが、史料の中には中等教育では珍しい「共学」の形となっていた「女子部」のものや、中学校と高等女学校の卒業生を受け入れた「第二部」に関するものもある。本稿はこれらを含めて、数学教育に関係する旧蔵文書の全体像を示すことを目的としている。

### 1. 和歌山県師範学校旧蔵文書の概要

#### (1) 史料全体について

本学部歴史学教室が『和歌山大学教育学部所蔵和歌山県師範学校旧蔵文書目録(分類別)増補版』(2012年2月)(以下「目録」と呼ぶ)として整理し、現在紀州経済史文化史研究所に保存されている師範学校時代の史料は978点に及ぶ。「目録」ではこれらを次のような14分野に分けている。

「01県学」：県に関係する明治5年以前の文書、「02庶務」：「和歌山県師範学校教育状況」、「和歌山県師範学校一覧表」など学校の概況を記した文書など、「03教務」：「本科第二級級生学年試験問題集」なる定期試験綴りや出席簿、「級務簿 3学年乙組」など学級ごとの文書、「04入試」：「男子備科入学試験問題」など実際に行われた入試問題綴りや採点一覧、「05生徒管理」：「学科受持一覧表」「通学生徒原簿 三年」など。

「06教授細目」：「教授細目(数学科)」など各教科の教授細目。附属小学校のものもある。「07教授法」、「08授業計画・記録」：後述する「教授予定及進度週録 第1学期」「受業録」など進度予定や授業記録、「09教材」：「博物標本図解」など、「10図書」：「書籍原簿 甲」など図書管理に関する文書、「11生徒研究・作文」：「研究報告書(氏名)」という様式の薄い冊子。教育実習記録で個々の生徒について作成されているため、544点と史料の過半数を占める。

さらに、「12調査」：「(方言取調書)かの部 六号」など地域の方言に関する調査研究、「13教員検定」：「尋常小学校本科正教員検定試験問題」など、そして、「14その他」である。

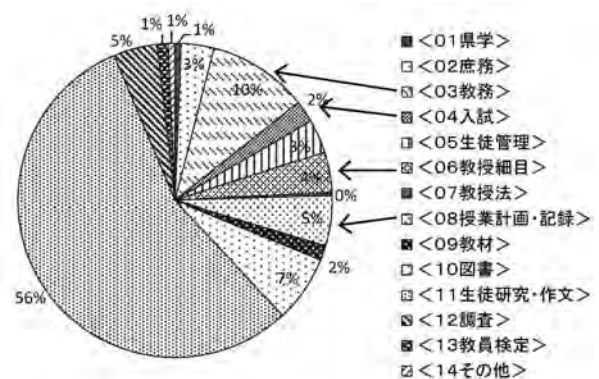


図1 全史料に対する各分野の割合

それぞれの史料の占める割合は図1のとおりである。「11生徒研究・作文」は56%に上る。これらは生徒一人につき1点が残されているが、「08授業計画・記録」の中には10年程度の内容が1冊にまとめられたものもあり、それぞれの割合は大まかな目安程度といえる。

これらの中で数学教育に関係するものとして、「03教務」の中に定期試験の問題冊子、「04入試」の中に「入学試験問題」、「06教授細目」の中に「数学科教授細目」、「08授業計画・記録」の中に「教授予定及進度週録」などが含まれている。「11生徒研究・作文」の中にも後に数学教育界で大きな業績を残す方の、珍しい教育実習録もある。

ところで、和歌山県師範学校は明治8(1875)年の開校から昭和18(1943)年のいわゆる官立移管までおよそ70年の歴史があるが、残された旧文書の年代にはやや偏りがある。図2は「年不詳」と記されたものを除く849点について、「目録」にかかれた作成年別の史料数である。明治45年が突出しているのは、「明治37~45」と記された「生徒研究」154点を便宜上明治45年に算入しているからで、それも含めて数の多い「11生徒研究・作文」を除いた391点の作成年別のグラフが図3である。

これらを見ると史料の作成年が明治30年代後半から明治末ころまでに集中していることがわかる。同窓会

が後に振り返って、明治31年から「第3期 膨張時代 第1次」、明治41年からを「第3期 膨張時代 第2次」と呼んだ時期である<sup>7)</sup>。教育課程の整備や入学定員の増加など、教育活動の充実し始めた時期ではあるが、その後の史料が極端に少なくなる理由などは不明である。

「第2次膨張時代」の後半や、教育課程の大きな改革があり同じく同窓会が「第4期 師範教育改善時代」と呼ぶ大正末以降の史料がまだまだ少数であるのは、今後にいっそうの努力を残しているところである。

(2)数学教育関係

主として明治末期の師範学校における数学教育をうかがい知ることのできる史料には、先述したとおり、定期試験問題の冊子、授業の計画を記した「教授細目」、実際の授業の実施記録である「教授予定及進度週録」などがある。いずれも当時の実際の指導内容を直接見ることのできる貴重なものである。教育課程ばかりではなく、使用教科書や授業の進み具合、試験問題を通した指導内容など、豊かな情報に接することができる。

和歌山県師範学校は設立から15年ほどは男子のみの入学であり、史料にも男子に関するものが多いが、明治24(1891)年には「女子部」が設置され、試験問題や教授細目など、女子の中等数学教育では珍しい実物史

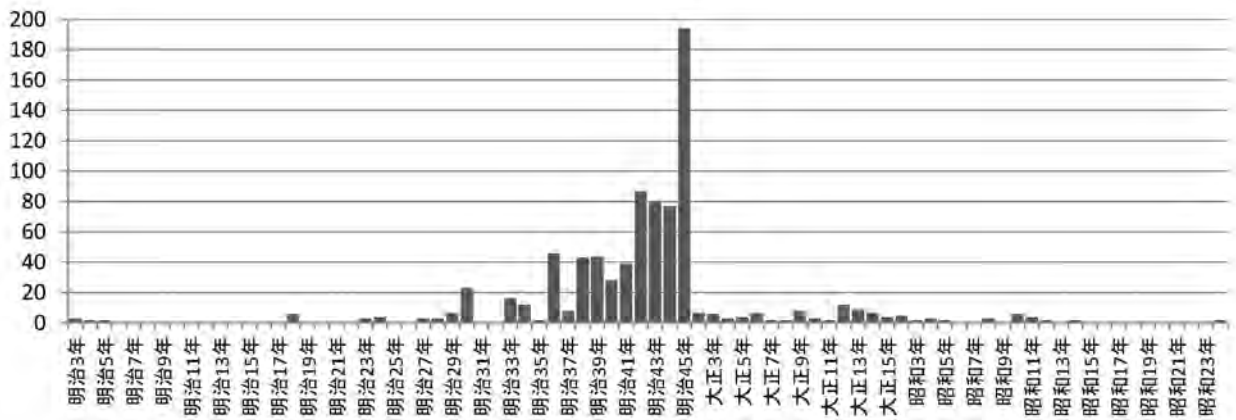


図2 作成年別史料数(年不詳除く849点)

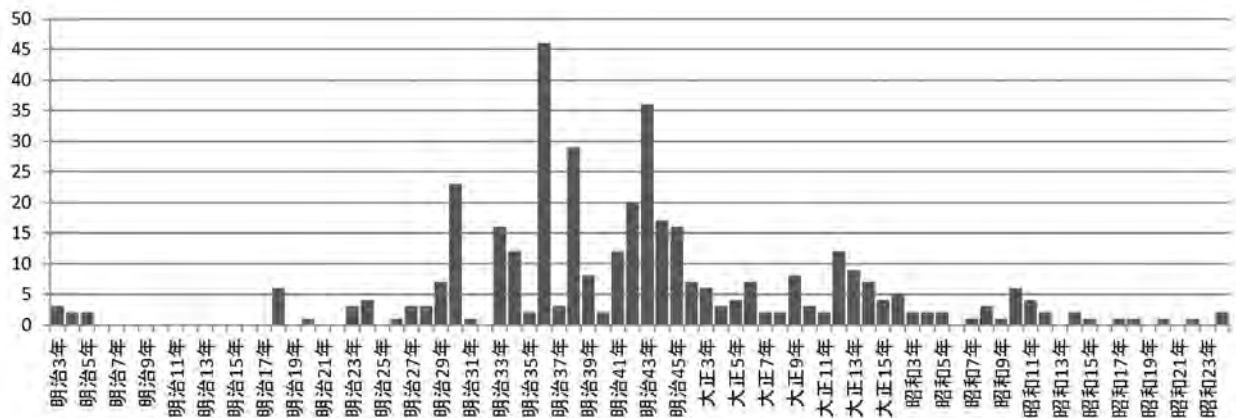


図3 作成年別史料数(年不詳および「11」を除く391点)



	算術	代数	幾何
1年	1	1	2
2年		2	1
3年		1	2
4年			3

	算術	代数	幾何
1年	4		
2年		2	1
3年		1	2
4年		1	2

図5 左：明治44年入学から、右：大正3年入学から

それはちょうど、諸外国の数学教育改造運動の影響を受け始めた時代でもあったが、上級学校の入学試験に強い影響を受ける旧制中学校では、改革の機運はなかなか浸透しなかった。その一方で、師範学校では生徒たちの実情に合わせて柔軟に対応した教員養成を模索するとともに、中等教育の担い手としても社会的役割に応えようとした努力がうかがえた。

### 3. 女子部

前述したとおり、「女子部」は明治24(1891)年に設置され、1期生26名が入学している。その後明治36(1903)年には総定員が105名(3年制、学年35名)、同41年からは160名(4年制、学年40名)に拡大され、大正末からは200名の時期が続いた。大正13(1925)年には「第二部」を定員40名で設け、80名にまで拡大している。昭和4(1929)年には日方に移転して独立校となった。

表1に示したように、「女子部」の史料は比較的少ない。定期試験問題はほぼ明治41(1908)～43年に限られ、「教授細目」は明治43年の3年生と44年のものだけである。「教授予定及進度週録」は男子と同じ冊子に明治41～大正6(1917)年まで残されている。小学校の義務教育年限が6年となったのに伴って師範学校の入学年齢が引き下げられた明治41(1908)年に、「女子部」は3年制から4年制となり、文部省による初めての教授要目が制定されるのが明治43年である。この時期は種々の制度的変更がなされており、それらを学校現場レベルで明らかにすることは大きな意味がある。さらに、当時女子中等教育の中心であった高等女学校と対比して数学教育の内容を解明することは、女子教育の観点からも有意義である。

3年制から4年制への教育課程の変化は、教授細目や進度週録によってある程度詳しく知ることができる。ただ、定期試験の史料は明治43年までであり、44年に初めて誕生する4年生の詳しい内容までは残念ながら知ることができなかった。

史料から明らかになった事柄を整理しておこう。まず、数学の教育課程である。明治43年に教授要目が示されるまでは、同25年に改訂された「尋常師範学校の学科及其程度」に基づいていた。女子の部分はほぼ全文を引用しても、表2の程度の簡素なものであった<sup>9)</sup>。

表2 明治25年「学科及其程度」女子の部分

	算術	幾何の初歩	算術教授法
1年	整数、分数、小数の四則、及び比例と百分率。珠算。		
2年	比例と百分率と開平、開立。珠算。	線、角、面、体の種類と性質、関係	
3年		前学年のつづき	算術および幾何を教授する順序方法

表3 明治43年「師範学校教授要目」女生徒の部

	算術及代数	幾何
1年	整数、小数、分数 負数、整式、分数式 1次方程式、分数方程式	
2年	開平、開立 2次方程式	直線、直線形、円
3年	等差級数、等比級数 歩合算 小学校算術教授法	比、比例、相似 求積
4年		平面、多面体、 曲面体

明治43(1910)年に初めて定められた師範学校教授要目では、やや詳しく内容が示されることとなった<sup>9)</sup>。表3に示したように、この内容は男子の部と比べても三角関数と簿記がないくらいで、ほぼ匹敵する高度なものであった。

和歌山県師範学校の明治43年の「教授細目」は3年生のみが残されている。図6のように、1週ごとに事細かに記されたもので、代数、幾何それぞれ数ページずつからなる。図6は代数の初めの部分で「因数分解の続き」から始まることがわかる。

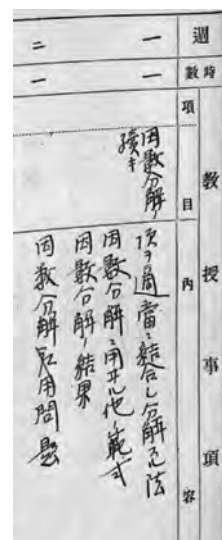


図6 明治43年「女子第三学年教授細目」

これらの内容を学期ごとに大まかにまとめたものが表4である。

表4 明治43年「教授細目」の内容

	代数	幾何
1学期	整式と因数分解 分数式	直線図形の面積 円、弧及び弦 中心角及び円周角 接線及び二つの円
2学期	2次方程式	内接外接正多角形 比と比例
3学期	2次連立方程式	作図題

明治43年の3年生の指導内容は、明治25年の「学科及其程度」をはるかに上回り、明治43年の教授要目の2年生ないしそれをやや越える程度であることがわかる。教授要目は同年5月31日に通知されているため、和歌山県師範学校の「教授細目」がこれに準拠したとは考えられない。むしろ各学校での試みや努力を教授要目が追認する形で定められたのではないだろうか。

43年の「教授細目」が全教科の掲載されたものであったのに対して、「女子部数学科教授細目」と題する写真1のような冊子がある。



写真1 「女子部数学科教授細目」

この冊子には明治44(1911)年に最初となる第4学年の記載があり、男子にも同年の教授細目があることから、44年のものであると推測される。その教育課程は43年の教授要目を概ね反映したもので、例えば図7のように第4学年の第1学期は「直線と平面の関係」という空間図形で始まっている。

この2冊からわかるのは次の2点である。第一に、43年の教授要目にも「地方の状況に適切なる教授細目を定め」と記されたように、各師範学校では独自のカリキュラムを立て、実践していたことである。

第二に、女子中等数学教育としては相当に程度の高い内容を扱っていたことである。43年の教授要目が男子に近い内容であり、当時の高等女学校の数学と比べても高度な学習をしていたことがわかる。

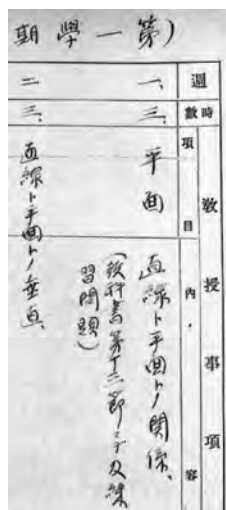


図7 「細目」4年1学期

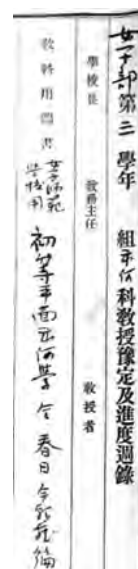


図8 「進度週録」にある教科書

次に史料からわかることからは、使用教科書である。中等数学教育では明治以降すべて検定教科書であるが、実際の使用教科書は不明ことが多い。「教授予定及進度週録」にはそれらが詳細に記されている。そこから読み取ることができるのは以下のような点である。

- (1)算術教科書では、男子部や旧制中学校などと同じ藤澤利喜太郎の『算術教科書』(明治29年、大日本図書)を用いていたが、明治末から「師範教科」と銘打った師範学校向けの吉田好九郎『代数及算術』(明治43年、富山房)に切り替えていった。
- (2)平面幾何の教科書は、男子部で一般的であった菊池大麓のものではなく、春日今朝蔵の『初等平面幾何学』(目黒書店)を用いていた。図8は大正元(1912)年の「教授予定及進度週録女子部2年生」である。
- (3)明治44年から始まった4年生の立体幾何学には、飯島正之助、三上義夫編『立体幾何学：中等教育用』(明治41年、水野書店)が用いられた。同時期、男子部では林鶴一『新撰幾何学教科書〔立体之部〕』(明治37年、開成館)であった。

以上のように、教科書は生徒の実態に対応したものに變更してきたことがわかる。ただこのことは内容の平易化を必ずしも意味しない。例えば(3)で述べた『立体幾何学：中等教育用』では全体の約半分を直線と平面の関係の論証的な扱いに割き、錐体の体積が柱体の3分の1であることを極限の考えを使って証明するなど、厳格な展開はそれまでの教科書と大きな違いがない。

#### 4. 第二部

明治40(1907)年の師範学校規程によって旧制中学校や高等女学校卒業生を受け入れる「第二部」が設けら

れることになった。和歌山では男子部が翌41(1908)年、「女子部」はやや遅れて大正13(1924)年に設置された。

表5は明治42年の「進度週録」から作成した週当たりの時間数である。修業年限は1年であり、師範学校規程に定めた教科が網羅されている。同規程では「教育」は実習も合わせて週当たり15時間となるよう記されているので、実習のない学期から作った表5は若干時間数にずれがある。

数学の内容について同規程では、「算術を授け、かつ教授法を授ける」とだけ記され、男子には「簿記の大要」が加えられているのみである。小学校の算術指導のために、おそらく中学校で学習済みであろう算術を復習するとともに、教授法を扱うという構成である。

明治44年のものと推定される、作成年が不明な「数学科教授細目」<sup>8)</sup>には、男子「第二部」の指導計画が記されている。図9はそのうち算術の2学期冒頭の部分である。分数の性質や約分通分など算術の基礎的な部分をあらためていねいに扱っていたことがわかる。



図9 「数学科教授細目」第二部2学期の冒頭

「教授細目」に記された指導内容は表6に示した通りである。1、2学期とも15~16週程度(週2時間)で指導されていたものである。教科書ではなく参考書として藤澤利喜太郎『算術教科書上巻』(明治29年、大日本図書)が用いられていたことは、「教授予定及進度週録」からも確認されている。旧制中学校でいえば1年生で扱う内容を、あらためて「第二部」の数学として再学習していたことがわかる。

表6 「教授細目」による指導内容

学期	主な内容
1学期	緒論 整数、小数の加減乗除 諸等数(メートル法など) 整数の性質(約数、倍数など)
2学期	分数 比及比例 歩合算 利息算 算術教授法

表6の「教授細目」で計画が2学期までとなっているのは、3学期を教育実習に充てるからである。「教授予定及進度週録」によれば、実際には3学期の3週間程度を「算術教授法」に費やし、その後およそ2ヶ月の実習に行っていることがわかっている。なお、「算術教授法」の教科書には小学校の国定教科書が指定されているだけで、授業はその解説という形で進められたと推測できる。やはり「教授予定及進度週録」によれば、その時間数は僅か10時間程度である。

表1に記したように、創立から3年間は定期試験問題も残されている。初年度の1学期試験は次のようなものであった。

- (一)グリニッチの正午は米国ニューヨーク(西経74度3秒)の何時か。
- (二)分数を小数に直す為に分母を以て分子を割るに割り切れずに出る限りなき小数は必ず循環小数である。その理由を問う。
- (三)二十四町四十九間三尺六寸を里の小数第五位まで算出せよ。

いずれも参考書であった藤澤利喜太郎『算術教科書上巻』に登場する内容で、(二)は「分数を小数に直すこと」という項目にある文言とまったく同じである。ただ、この部分は280頁余りある本のほとんど終わりに近く、1学期で上巻1冊を終える早い進捗であったことがわかる。2学期の試験は歩合算、利息算が中心であり、これは同教科書の下巻に当たる(3学期はほとんどが教育実習であった)。1年という短い期間で小学校算術を指導する素養を身につける方法として、中等教育段階の算術内容が重視されていたことがよくわかる史料である。

簿記は「複式簿記」と「単式簿記」を週1時間学ぶ。明治43年の教授要目でも学習項目として記されたが、大正13(1924)年の改訂教授要目では削除されている。

明治40年の師範学校規程を説明した「新令制定の趣旨」<sup>9)</sup>で文部省は、中学校や高等女学校卒業生で小学校教員になるものが多いが、それまで「知識技能未だ十分ならざる」状態であったことを指摘し、「一定の課程のもとに新たに第二部を設け、正教員養成の途を開きたる」と述べている。同年から義務教育6年制が実現し、学齢児童の就学率も97%を越える時代で、小学校

教員養成の拡大を急ぐという背景があったのである。「第二部」の設置が後に専門学校に昇格する(昭和18(1943)年)基礎となったと言われており、小学校教員養成における数学教育の在り方という観点から、今少し研究を深めるべきであると考えている。

## 5. その他の史料

教育課程や授業内容を知ることのできるものではないが、史料全体の紹介においてその過半数を占めると述べた「生徒研究」の中に、後に数学教育界で多大な業績を残す二人の報告書が含まれている。師範学校4年生のときの教育実習の報告書である。

二人は、ともに元東京高等師範学校教授で、1958～1965年に日本数学教育学会会長を務めた佐藤良一郎と、同名誉会員であった鍋島信太郎である。昭和48(1973)年に鍋島が亡くなった際の追悼文に、存命であった佐藤の談話として次のような一節がある<sup>10)</sup>。

鍋島君と僕とは、六十六年前、和歌山県師範学校の予備科に入って共に机を並べ、あいついで東京高等師範学校の数・物・化学部に入って学業を共にし、さらに、東京高等師範学校附属中学校並びに東京高等師範学校・東京教育大学で職場を共にし、相携えて同じ数学教育の実践と研究の道を進み続けてきた。想えば、六十六年にもわたる永い永い二人三脚だった。



写真2 佐藤、鍋島の「研究報告書」

同級生である二人が和歌山県師範学校を卒業したのは明治45(1912)年である。その教育実習報告として、佐藤は「外国地理教授において教材をいかに取り扱うべきか」をテーマに32ページの報告書、鍋島は「算術教授の欠陥とその救済策」と題する25ページのを残している(写真2参照)。いずれも毛筆縦書きの細かい文字で綴られている。

算術教育をテーマとした鍋島のものは、実習を通じて感じた自らの一般的な16の「欠陥」と、担当した学級に関する三つの「欠陥」を記している。一般的な「欠

陥」として、例えば「三. ある目的を達するに適切な教材を選ばぬ」という項目を立て、教科書のまま何の考慮もなく授業することがあったが、忙しいとはいえ不必要に難しい問題を扱い混乱させた。「授業者は教材選択について十分深き注意を払うべきである」と厳しい反省を述べている。教材や練習方法、黒板の文字に至るまで詳細に振り返って記した報告に、担当の先生も「よく平素訓導より批評指導することは細大網羅して漏らすことなきは実に嬉し」「算数科教材の取扱方につきての意見良し」などと称賛し、「採点九十五点くらい与えたし」と高く評価している。「東京高等師範学校附属中学校にあっては、いつまでもいつまでも教え子に慕われる暖かい先生」<sup>11)</sup>であったと評される鍋島の、若き日の教育者としての熱意ある姿が目には浮かぶのである。

なお鍋島の名前は、一般に「ノブタロウ」と読まれることが多く、創刊間もない『日本中等教育数学会雑誌』の大正10(1921)年頃の刊に「N. Nabeshima」のローマ字表記が見られる。一方、戦後その同じ学会が発行する『算数教育』の1954年頃の刊には「シントロウ」とも読める「S. Nabeshima」の表記も見られ、詳細は不明である。

佐藤良一郎は鍋島亡き後も平成4(1992)年に満100歳で亡くなるまで、さらに長きにわたって数学教育界に貢献した<sup>12)</sup>。

「生徒研究」に分類される史料は全部で500を越える。算術教育に関するものは他にも多数あり、明治期の教育実習の指導や算術教育の姿を知る上で貴重な素材であると考えられる。それらの探究も今後の課題としたい。

## まとめ

旧師範学校には高等小学校卒業後に入学する「第一部」と、中学校や高等女学校卒で入学する「第二部」があり、それぞれ「男子部」と「女子部」があった。本稿ではこれまでの主として「男子第一部」の考察に加えて、「女子部」や「第二部」の資料を分析し、明治末期の数学教育の内容や特徴を明らかにした。加えて、教育実習報告書から、後年数学教育に貢献した二人の卒業生のものを紹介した。今回及びこれまでに参照した資料を文末に一覧にした。探索すべき史料はまだ多数残されているはずで、題名の「全体像」を示すには未だ不十分かもしれない。引き続き貴重な文書の解明に努めていきたい。

本小論は地道な史料の探索作業や解読に従事した卒業生たちの努力の上に成り立っている。氏名を記して感謝の意を表します。平成25年度卒業生青木涼君、石田修大君、小倉佑木君、川口格君。

## 注

- 1) 和歌山県師範学校校友会『40周年記念号』(大正4年)、同『50周年記念号』(大正15年)、同『60周年記念号』(昭和10年)による
- 2) 拙稿「教授要目制定前後の師範学校の幾何教育—和歌山県師範学校旧蔵文書から—」、『数学教育史研究』、日本数学教育史学会、第11号、2011年
- 3) 拙稿「明治・大正期の師範学校の数学教育—和歌山県師範学校旧蔵文書から—」、『和歌山大学教育学部紀要(教育科学)』、第62集、2012年
- 4) 拙稿「明治末期師範学校の立体幾何教育の様相—和歌山県師範学校定期試験問題「平面と直線の関係」から—」、『全国数学教育学会誌 数学教育学研究』、第19巻第2号、2013年
- 5) 教育史編纂会編『明治以降教育制度発達史 第三巻』龍吟社、昭和13年、p.617
- 6) 教育史編纂会編『明治以降教育制度発達史 第五巻』龍吟社、昭和13年、p.635-637
- 7) 明治41年の「官報」に「新潟県長岡女子師範学校教諭に叙する」旨の記載がみられるが、書籍実物は確認できていない。ただし、文部省『師範学校・尋常中学校・高等女学校検定済教科用図書表 明治43年度現在』には、p.87に長岡女子師範など6校と並んで使用していたことが記されている。
- 8) 前掲(2)でその推定の根拠を詳述した。
- 9) 前掲(6)、p.574
- 10) 井上義夫「名誉会員故鍋島信太郎先生を弔う」『日本数学教育学会誌』第55巻12号、1973年
- 11) 同上
- 12) 「第8代会長佐藤良一郎先生のご逝去を悼む」『日本数学教育学会誌』第74巻8号、1992年、  
「座談会 第8代会長 故佐藤良一郎先生を偲んで」『日本数学教育学会誌』第75巻6号、1993年

(資料) 本稿で参照した和歌山県師範学校旧蔵文書の数学教育関係史料一覧

	通番	西暦年代	年代元号	分類	表題
定期試験問題	38	1890.03	明治33年3月	03教務	本科第二学級生徒学年試験問題集
	39	1890.1	明治33年10月	03教務	本科第四学級生徒学年試験問題集
	40	1891.03	明治34年3月	03教務	本科第一学級生徒学年試験問題集
	760	1901.3	明治34年3月	04入学試験	本科第三年級生徒試験問題集
	755	1900.10	明治33年10月	04入学試験	本科女子第三年級生徒
	758	1901.3	明治34年3月	04入学試験	本科女子第一年級生徒学年試験問題集
	759	1901.3	明治34年3月	04入学試験	女子第二年級生徒学年試験問題集
	761	1908	明治41年年度～	04入学試験	第二部試験問題綴
	762	1923	大正12年	04入学試験	試験問題綴
763	1924	大正13年	04入学試験	試験問題綴	
入学試験	113	1908	明治41年	04入試	男子備科入学試験問題
	114	1908	明治41年	04入試	女子備科入学試験問題
	117	1927	昭和2年	04入試	本科第二部女子入学試験問題
	118	1929	昭和4年度	04入試	本科第二部入学試験問題
教授細目	159	1905	明治38年	06教授細目	教授細目(数学科)
	176	1910	明治43年	06教授細目	女子 第三学年教授細目
	192	1908まで	(明治38～41)	06教授細目	数学科教授細目
	193	1908まで	(明治38～41)	06教授細目	女子部 数学科教授細目
教授予定進度週録	200	1908	明治41年	08授業計画・記録	教授予定及進度週録 第1学期
	201	1908	明治41年	08授業計画・記録	教授予定及進度週録 2学期
	202	1908	明治41年	08授業計画・記録	教授予定及進度週録 3学期
	:	:	:	:	:
	245	1917	大正6年度	08授業計画・記録	第一部男第4学年教授予定及進度表
	246	1917	大正6年度	08授業計画・記録	第一部男第4学年教授予定及進度表
247	1917	大正6年度	08授業計画・記録	第一部男第4学年教授予定及進度表 第2学期	
生徒研究	525	1912まで	(明治37～45年)	11生徒研究	研究報告概評 鍋島信太郎
	548	1912まで	(明治37～45年)	11生徒研究	研究報告書 第12学級教授 佐藤良一郎

\*1 通番以下の記載は『和歌山大学教育学部所蔵和歌山県師範学校旧蔵文書目録(分類別)増補版』(2012年2月)による

\*2 教授予定進度週録は多数にのぼるため途中を省略してある

\*3 分類で「04入学試験」とある700番台のものは、実際には定期試験である